

論文の和文要旨

論文題目	依頼行動の対照研究からみた日中の対人コミュニケーションの特徴 —ディスコース・ポライトネス理論の観点から—
氏名	謝 韞
<p>本研究は多くの言語社会において行われている対人行動である依頼行動に焦点を当て、大学生である日中両言語の母語話者同士間で行われた依頼会話の分析を通して、2者間の相互作用における、依頼行動の特徴を談話レベルから明らかにする。そして、談話レベルからみた依頼行動及びその動きにおける、2者間の相互作用がもたらす会話の展開という内的な要因と、会話者同士の学年、話される依頼の内容、話される言語の違いといった外的な要因が依頼行動に及ぼす影響や、その影響によってみられた依頼行動の動きを円滑なコミュニケーションの維持・構築が目的である、ポライトネス理論及びディスコース・ポライトネス理論という枠組みの中で体系的に扱い、依頼行動に現れる対人コミュニケーションのあり方に迫った。</p> <p>序論では、ポライトネス理論の中で、行われた英語や日本語や中国語の依頼研究を扱い、依頼行為を2者間の相互作用という立場から考察した際に、依頼行動を捉える理論的な枠組みや依頼会話の収集から分析までの方法論にみられた限界を次に示す。</p> <ol style="list-style-type: none">(1) 依頼行動を絶対的なポライトネスの枠組みの中での研究が多い。(2) 依頼行動の分析に用いられるデータは、実際の相互作用が反映されない質問紙調査によるものが多い。(3) 依頼会話を分析した研究が少ない上、依頼行動が一連の相互作用の中で捉えられず、依頼会話より、依頼する側と依頼される側とのやり	

とりを1回のやりとりにおける、依頼行動の研究がほとんどである。2者間による相互作用がもたらす会話の展開という内的な要因や、相互作用同士間の共起などといった観点からの研究はほとんどない。

上述の限界を踏まえ、本研究は、日中の依頼行動を同一の枠組みにおいて相対的に捉えられる、対人コミュニケーション理論として構想・展開されている『ディスコース・ポライトネス理論』を理論の枠組みとし、人間の相互作用を分析するために確立された「言語社会心理学的アプローチ」を依頼会話の収集から分析までの方法論として用いて、次のようなリサーチ・クエスチョンを立てた。

- (1) 依頼会話においては、依頼する側がいかに関言語行動によって、依頼を引き受けてくれる相手に依頼を切り出し、そして相手との相互作用の中で、依頼が承諾され実行されていくように、相手に働きかけているのか。
- (2) 依頼の内容が依頼を引き受けてくれる相手にかかる負担が異なった場合、談話レベルからみた依頼行動には何らかの変化がみられるのか。
- (3) 依頼を引き受けてもらう相手が依頼する側との年齢差がある場合や差がない場合、談話レベルからみた依頼行動には何らかの変化がみられるのか。
- (4) (2)と(3)の結果を踏まえ、日本語母語話者と中国語母語話者の依頼行動において、類似点のほかに相違点はみられるのか。
- (5) (2)(3)(4)の結果では、依頼する場面や異文化といった要素が談話レベルでの依頼行動に及ぼす影響がみられた場合、対人コミュニケーション理論として構想・展開されている『ディスコース・ポライトネス理論』(宇佐美 1998, 2002, 2003 など)を用いて、依頼行動の動きとそれのメカニズムを体系的に説明することが可能であるのか。
- (6) 日中の依頼行動にみられた対人コミュニケーション特徴を両言語社会の文化論の裏付けとなりうるか。

第2章の依頼会話の収集と依頼行動の分析では、「言語社会的心理学アプローチ」に従って行った、依頼会話の収集から分析までの一連の作業について、依頼会話の内容や参加する協力者の学年などの条件を統制して集め

られた日本語の依頼会話と中国語の依頼会話 76 組、計 152 組の概要、定量的分析がしやすい形で作成された日本語と中国語の依頼会話の文字化資料、依頼会話における依頼する側と依頼される側によるやりとりを内容面において次の 11 項目に認定した。それは、依頼会話における「開始談話」、「見込みの確認談話」、「状況の説明談話」、「会話の目的が伝達される談話」、「依頼の実行が調整される談話」、「再依頼する談話」、「依頼が実行される談話」、「対人配慮談話」、「依頼の失敗を受け入れる談話」、「その他の談話」、「終結談話」である。最後に、その分析項目の認定結果の信憑性を図るために行った結果を示す。

第 3 章の結果では、会話の展開や依頼する側と依頼される側との間の学年の差や異なる依頼内容の 3 つの観点から、会話に現れるやりとりみられた依頼行動を特徴を量的・質的(順序)から捉えてみた。

第 4 章では、3 章で示された依頼行動の分析結果に基づき、日本語と中国語の談話レベルからみた典型的な依頼行動のパターン(基本状態)を次のような構成要素(依頼行動)によって構成されていると同定した。

<日本語による依頼行動の基本状態>

<…見込みの確認行動⇔状況の説明行動⇒会話の目的(依頼)の伝達行動…>

<中国語による依頼行動の基本状態>

<相手を呼びかける行動⇒会話の目的(依頼)の伝達行動⇒…⇒対人配慮行動…>

そして、日本語の依頼行動の基本状態は会話の展開という内的な要因によって変化するのに対し、中国語の依頼行動の基本状態は依頼内容が相手かける負担という社会的な要因によって変化する、という変化のメカニズムを見出した。なお、「…」の部分には基本状態の構成要素でない依頼行動を示している。

最後に、日中の談話レベルからみた依頼行動における類似点と相違点をディスコース・ポライトネス理論の枠組みの中で捉え、依頼行動にみられたディスコース・ポライトネスの基本状態とその変化のメカニズムの相違に基づき、日中の対人コミュニケーションのあり方について考察した。